

ゲート 奴隷 彼の地  
にて、 斯く戦えり

顔面要塞

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

帝国辺境で、記憶を失いながらも健気に生きようとする鉱山奴隷バルド。

生真面目な働きぶりと、頑丈な肉体でもって解放奴隷の地位までもうすぐの所で、帝国が開戦する。

鉱山奴隷には縁のない話だと思っていたら、頭数を揃えるために軍に強制徴用される。

何の因果か、帝国の聖地に建つ得体の知れない勢力に向けて前進しなければならなくなつた……。

# 目次

中尉	傭兵	雇用	捕虜	奴隸
40	28	19	10	1



## 奴隸

何時の頃からだろうか？自分の境遇に嘆かなくなつたのは・・・。

何時の頃だつたのだろうか？生きていく為の努力を放棄し、惰性のまま状況に流されるようになったのは・・・。

そして・・・いつ頃かだとか考える事を放棄しはじめたのは・・・。

だが、希望が無いわけではないから。日々、僅かな糧を頼りにして今日も働いている

：

俺はバルド：：しがない奴隸身分：解放奴隸を目指して、今日も砂金を見つけ出すために泥の河に身を置く：

「オイ!!!ソコノやつ!!!ウゴケナクナツタ奴などホツテおけ!!ソレヨリモ、今月は収獲量が少ない!!モット気合をいれんかあ!!」

僅かなランタンによる明かりの中で。半裸の男達が、身ぎれいな看守の様な監督官の酷い訛りのある命令を受けながら泥水の中から砂金を取り出そうと、ふるいにかけて続ける。

明かりが乏しい夕闇の中では、砂金を見つけ出す事がより困難になるだけなのだが。監督官にも上役がおり、彼もまた仕事の都合上無駄だと知りながら、奴隷達に対して仕事を促さなければならなかった。

「……すまない。後で精がツクものを見繕って来るから……少し、休んでいてくれ……」  
明滅するランタンに照らされた倒れた男の顔つきは蒼白で、今にも息を引き取りそうになっていた。もつとも、倒れた男に呟きかけた男も、栄養不良から視力が落ち、男の状態を確認する事が困難になっていた。

「……あ……ありがとう……。俺は……もう……駄目だ……バルド。」

「諦めるな……!!しやべれる体力が在るうちは簡単に死ねないさ?故郷に帰るんだろうソラン?」

「……ふっ……お前と喋っていると死ぬのが馬鹿らしい事に感じるな……」

「当然さ?戦争捕虜なんだろ?まだまだ苦しめってお前が送った冥界の奴等が叫んでるよ。」

「……そうか……まだ苦しまなければならぬのか……」

「それじゃ後でな?監督官も莫迦じゃない。もうすぐ無意味な作業も終わるさ?帝都から来た新任の坊ちゃんが張り切っているだけで、そろそろ中止を提案するだろ?休んどけ?」

倒れた男を介抱し、落ち着かせた後。監督官に手を上げ、作業に戻るヒデト。その姿を見て監督所に戻る監督官。

ヒデトの推測どうりに無意味な作業は一時間も経たずに終了し。奴隷達には詫びのつもりか、大麦の粥と焼いたニンニクが配膳されたのだった。

久し振りに食べごたえのある配膳で腹を満たすと。自然、自分の境遇を考えてみたくなる。

先ずは自分の現状を整理してみる。むさ苦しい奴隷身分、金鉱山の作業員として日々酷使される。この場所に送り込まれたのは一年前。街道上に血を流して倒れていたのを、近くの農家が介抱して。その後、奴隷商人に売り飛ばされ、鉱山奴隷として身を置くことになった。

酷い話に聞こえるかもしれないが、帝国では身分保障もない人間には権利など存在しない。ここで働かされて、嫌という程身に沁みた。

そして、自分の名前であるバルドも自分のものではないらしい。言葉が通じる様になった半年辺りから、監督官が教えてくれた。頭に受けた怪我のせい、記憶に障害がある様だ。事実、介抱された以前の記憶が無い。バルドとゆう名前も、見た目から付けられた。おおつびらに言つて『髪の毛薄い奴』という意味らしい。

髪の色や瞳の色が珍しい黒なんだから、そつちで名前を付けてもいいじゃないのかと

も思ったが。何故かシツクリきてるから困りものだった。

過酷な鉱山奴隸としては珍しく、半年以上も身体を壊さず働くものだから。いつのまにか古株になっていた。怪我などをしても異常に治りが早く、酷い怪我でも1日休めば労働に出られた。そんな事もあって昇進を考えていない軍を退役した監督官には重宝されていた。

古株になると、イロイロと頼られるし。監督官にも融通が効く様になる。奴隸の健康状態を維持する為の提案をしたり、採掘事業の計画を話し合ったりして生産性を上昇させたりもした。

事実、帝国の金鉱山の中でも。ここ、ヴィレテウス鉱山は毎月僅かずつではあるが生産量が伸びていた。まあ、イキナリ伸びても枯渇するのが早くなるだけだから、監督官と示し合わせて生産量を調整しているのは内緒の話だが…。

そんなこんなもあって『お零れ』が僅かずつではあるが、俺にも降ってくるようになって。何のことは無い。この境遇から抜け出したいと思っている奴は監督官の中にもいる。そんな奴に砂金を少量、つつ溜めこむ方法を教えれば、自然とコチラにも配分が回ってくる。

記憶の障害は治らないが、何故か読み書きは身につけていたようだ。帝国公用語も半年経つところには覚えてしまい、算術の様なモノも含めて書類仕事もやる様になってい



た。

まあ、帝国全体では少量の生産量の上昇などは好ましい事と思われる程度だから。監督官達の退官後の生活が安定する程度には帳簿を誤魔化す事など些事に過ぎなかった。

帳簿の状況や、監督官達の話を聞く限りにおいては。どうにも帝国は拡大期を過ぎて停滞期に入っている様だ。実際の所、俺達にとつてはドウデモイイ話しだったから気にしちやいなかったが。

解放奴隷身分まで後僅か程で、こんなところに連れて来られるとは思っても見なかった……

それは、気持ちよく晴れた酷く暑い日だった……。

「栄えある帝国軍団の一員として!!諸君らに先陣の栄誉を与える!!彼奴等、緑の者どもは!恥ずかしげも無く帝国の神聖な地であるアルヌスの丘を占拠し……」

粗末な軍装に身を包み、これまた役に立つかどうかも分からない古びた槍と盾を与えられて、奇妙な丘に布陣する『緑の奴等』に相對している自分を自覚して、絶望を味わ

い始めている。

クダラナイ演説が延々と続くが、先発した部隊の惨状を目の当たりにしては。はなから存在しない士気など上がる筈も無い。本来なら逃亡を選択肢に加えるところだが、弓を備えた部隊が後方に構えており。その的が撤退の素振りをみせる奴隸部隊に向けられるとあつては、前進しか道は無かつた。

しかし、先発した部隊が訳も分からない攻撃によつて壊滅した場面を目撃したのには。方陣を連ねて突撃しか選択しない上層部は何を考えているのか……。敵の奇妙な楔形の陣地から『火の矢』が降り注ぐたびに、地面と一緒くたに吹き飛ばされた肉塊を見ないのだろうか？

「……………諸君らの帝国への貢献と勇気を示す時である!!」

考え事をしていたら、何時の間にか演説が終わつたらしい。これから先、あるかどうか分からない未来に向かって突き進まなければならない。

まあ、策が無いわけでもない。目の前の丘に陣取る勢力は、好んで殺戮に講じている訳では無いようだった。

先発した帝国正規軍の大半が吹き飛ばされちゃいたが。交戦の意思を喪い、撤退（言葉のアヤだ、逃げ帰って来ただけ）をした部隊には『火の矢』は飛んでこなかつた。

奴隸部隊である俺等には、逃げ帰るなんてことは許されないが。撤退するのに方向は

関係ないしな。しかも、奴隷身分の俺達には帝国に義理立てる事柄なぞ、これっぽちも無いわけだし。

「……おい……オイ！バルド！大丈夫なんだろうな……？」

同じ部隊に配属されたソランが話しかけてくる。ヤッコさん、上手く回復できたようで、すこぶる元気が良い。その元気の良さのお蔭で、今回は選ばれてしまったから何が災いするか分からない。

「何事もやってみなきや分からんよ？少なくとも吹き飛ばされて肉塊になるよりマシだと思っぜ？其れより、皆に伝えたか？」

「ああ……盾持ちはお前の合図で、すぐさま後方に展開出来る様に伝えた。皆、傭兵や野盗、軍上がりだからやれると思う……でも……」

「なんだあ？まだ不安なのか？いい加減、覚悟を決めろよ？軍経験あるんだろ？」

「人間、安全な所に長いこと居ると希望ってやつを持ちまう……あとチョットで解放身分だったのに……」

「諦めろ……。お前が信じてるエムロイってやつにお祈りしてみちゃどうだ？」

「……そっそうだな！……我が神……エムロイ様……」

やれやれ……どうにも軍にいたつてのは嘘臭い話だなあ……こんな状況で見た事も触れる事も出来ない存在に願いを託すなんてな……締まらない話だぜ……。

「・・バルド・・・皆、準備・・・トトノツタ・・テハズドウリニ動ける・・・」

鉦山奴隷にしては筋骨隆々な、半裸の獅子頭をもった獅子系ヒト種のライネルがボソボソと話しかけてくる。

「ああ・・・ありがとよ。ソランの奴が指揮階級だつてほごくから隊長に推薦したが・・正直、肝の据わり方でライネルに頼んだ方が良かったぜ・・・」

「ボヤクな・・・。何事も、エテ不得手がある・・・」

「正直・・・五分五分だ・・・全員が生き残れるか分からん・・・」

「ソレは承知の上だ。皆、お前をタヨリニシテイル・・・。他にイイ案もウカバナカッタしな・・・」

「よーっし!!! 上手く行ったら地獄の酒場で一杯奢るぜ!!! ソラン!! 声を掛けろ!!!」

「奴隷集団第一小隊!! 方陣隊形!!」

先程までの弱弱しきは全くなく、気合の入ったソランの掛け声が響く。

「オオー!!!」

奴隷部隊としては考えられない程の鬨の聲が響き渡る。それは、三個大隊で構成される奴隷部隊の中にあつても、異質と思われる程のモノだった。

「前段!!! 前進!! 帝国!! 万歳!!!」

奴隷部隊の士気の高さに驚きつつも、軍団の先頭を構成するゴブリンやコボルト、

オーガーとトドルを操る魔獣使い達にも指示を出す。軍団の実質的な先頭は、畜獣の様に扱われる彼等だった。

「先陣大隊!!前進!!」

奴隷部隊の指揮官の号令が響き渡る。しかし、その声は部隊の遙か後方。最後段の重装歩兵に守られた場所からであった。

さて・・・上手く行くかどうか・・・サイは投げられた・・・思うようにはならねえなあ・・・

前方に待ち構える、恐るべき楔形の陣が築城された丘に向かって。重い脚をあげるバルドだった・・・。

## 捕虜

雲ひとつ無い蒼い空を、一騎の竜騎兵が自由に駆けていた。

古代竜や新生竜、古竜を除けば。帝国にあつては最大の大きさを誇る竜であつた。大きさに見合わず、騎手に従う動きは機敏で良く訓練された見事なものだつた。正に竜人一体。帝国竜騎兵教則において、最高の練度を示す言葉通りの機動だつた。

空を征く竜人一体となつた彼等を阻む事は、如何なるものでも不可能に見えた。勿論、騎竜と共に空を翔ける騎手も、大いなる誇りと共にその様に考えていた。

帝国の聖地、アルヌスの上空にさしかかるまでは…。

騎竜と共に、地上に布陣する整然と整列する軍団を見下ろす。どんなに精強な部隊でも、俺達を補足することは出来ない。そして、軍団の最先陣を切り。帝国に栄光をもたらすのは空を支配する自分達だけだ。そう思いながら、主要武器である火炎壺を落とす準備に入ろうとした瞬間、目標であるアルヌスの丘に光が瞬く。

光を認識した瞬間。彼らの意識は、より高い次元を目指して旅立つのであつた…。

「前段!!前進!!帝国!!万歳!!!」

蒼く晴れた空の下、清々しきとは程遠い軍装に身を包んだ集団に進軍の号令が響き渡る。

軍団が目指すところは、自らが属する帝国にとって聖地と呼ばれるアルヌスの丘。聖地と言つても、何か特別なものがあつた訳では無い。せいぜい200年前に建立された記念碑があるだけだったが。今、その場所にあるのは皇帝の勅命により創られた異界に通じる門が佇んでいた。

勇猛な指揮官によつて率いられた軍団が目指す丘は帝国にとつての聖地ではなく。自らが戦を挑んだ勢力に占領された敵地に様変わりしていた。軍団の後方で指揮を執る首脳陣にとつては、いささか複雑な思いを抱くには十分な背景が存在していた。

もつとも、軍団最前列に位置する奴隷部隊にとつては恐怖の対象でしかなかった。仕方が無い事だった、何せ先発した完全編成の帝国正規軍一個旅団が『火の矢』によつて完膚なきまでに壊滅させられる場面を見ていたのだから。

数時間前。

士気も上がらず、まったく統率も取れていない奴隷部隊を蔑みながら。怪異共を先陣にして突き進む正規軍。

一糸乱れぬ統率の元。がっしりと組まれた完全武装の重装歩兵による方陣は、いかなる攻撃でさえ跳ね返す厚みで構成されていて。旅団を形作る兵達は、数々の戦場で帝国の栄光を高めてきた歴戦の者達だった。

先発した重装歩兵の頼もしさに目を奪われ。彼らが進めば、どの様な敵も粉碎されて骸をさらし、勝利を帝国にもたらす様に見えた。

だが、皆が忘れていたことがあった。如何に頼もしく威容な出で立ちであっても、所詮は腐り落ちる肉と砕け折れる骨で構成された人であることに……。

其の事を気付かせる様に、凄まじい爆発がアルヌスの丘で起こり。爆発の光を知覚する間もなく、恐るべき光景が旅団の頭上に顕われていた。軍に所属する魔導士達の破壊魔法など比較の対象にすらならない、火山の噴火の様な爆発が整然とした方陣を組んだ旅団を包み込む。

そして、爆発が起こした黒煙がゆっくりと流されてゆくと。平原に展開した旅団が、至る所で方陣上に打ち倒され。人の形を留めない肉塊としてのみ存在を赦されていた。

あれほどまでに蔑み、畜獣以下の扱いしかしてこなかった怪異達と同じ場所で、同じように吹き飛ばされてしまっていたのだった。

「ある意味……神つてのは平等なのかもな……。吹き飛ばされちゃ、見た目変わらんし



な？ミンナ仲良くひき肉で、平原の植物の肥料になっちまった・・・」

先程見た光景がよみがえる・・・いや、あまりにも異様な場面が脳裏から離れる事が無くなった。焼き付けられた記憶が原因で、頭がすっかり反応しなくなったのかもしれない。

「何ブツブツ言ってるんだ!!もうすぐ先発隊が吹き飛ばされた場所に、怪異共が侵入するぞ?!手筈どうりでいいんだよな!?バルド!!」

先程までの威勢の良さは何処へ行ったのか・・・指揮官然とした雰囲気は吹き飛び、いつもの奴隷身分のソランに戻ってしまっていた。

「うるせえなあ?もう既に冥界の門を潜つちまったんだ!覚悟を決めろよ?オメエさんの神さんにお祈りしたんだろ?加護でも信じとけよ?!

「俺が信奉しているのは暗黒の神エムロイ!!冥府は管轄外なんだよ・・・!」

「管轄とかあんのかよ・・・。ますます俗っぽい奴等だな?まあいや・・・どっちでも構わんからお祈りしとけ!!ハンク!!怪異達が立て札から先に侵入したら、盾を構えて身を屈めろ!!盾持ち全員に徹底させろ!!」

「う・・・うん・・・。で・・・でも・・・後ろの弓矢は・・・どうするの・・・?」

「相変わらずでけえ図体の割には、細かい事まで気にするやつだなあ・・・。」

「な・・・ナンカいったかな?」

「なんでもねえよ!!いいから、言われたとおりにしろ!!今んところお前さん達が頼りなんだからよ!!」

バルドの声に従って、小隊前列で盾を構える者らに声を掛ける狼系人種のハンク。本来ならば部族の慣習に従って傭兵稼業につくはずが。生来の気の小ささが災いして、無茶な命令を出した上官に怪我をさせ（本人は軽く押しただけと言っていたが）てしまい。鉱山に送られてきたのだった。

「アルヌスが噴火した!!!」

前列にハンクと共に配された鳥人種のカザールが、甲高い声で警告を発していた。

「おっぱじまったか!!身体を地面に着ける!!!盾はシツカリ上に構えるんだ!!!」

「・・・カイ・・・怪異達が・・・」

「ああたりたくなきや!!!しっかり言われたことをやってる!!!」

『火の矢』の爆発により吹き飛ばされる怪異達を、震える躰を抑えながら見続けるフェザール。

「バルド・・・?タシカに後方はキニナル・・・」

「・・・ああ・・・ハンクにはああ言ったが、射撃をいつ決断するか分からんからなあ・・・」

其処までライネルと会話した所で、アルヌスの丘で別の光が明滅する。一瞬、先発部隊の惨状が蘇って来て首を竦めて地面に屈み込む。

しかし、自分を含めて何事も無かった事に安堵し、周りの状況を確認しようとした時。督戦隊の居る後方で大きな衝撃音と炸裂が起こり、焰の中を悲鳴をあげながら逃げ惑う督戦隊が見えた。

「ありや・・・竜騎兵が落とされたな・・・。督戦隊めえ、いい気味だぜ？ハンク!!!後方は気にするな!!全員聞けえ!!!ここからが正念場だ!!気合を入れて、降伏の意思を表示するんだ!!!立て札の先には侵入するなよ!!!武器は捨てる!!盾をしっかりと上に構えて、地面にかがむ・・・」

バルドが見た目からは想像もできない大音量でもって、奴隷小隊全員に指示を出していたのだが。運命の悪戯か、竜騎兵を撃ち落とした二発の内の一発のミサイルが、燃焼不良を起こしバルドの至近に落下し。自らに収められた炸薬を破裂させたのだった。

今までに感じた事もない衝撃によって、地面に打ち倒されるバルド。

朦朧とする意識を手放さない様に努力し、状況を把握しようとするのだが。思うように身体が反応してくれなかった。衝撃の影響なのか、よく耳が聞こえない。それでも、皆の無事を確かめようと集中するバルドに、ソランの声が響いて来ていた。

「どうやら、まだ冥府への門を潜る事はなかったようだ。」

「冥府か・・・そんなところあんのかよ・・・」

自分自身で思いついた言い回しに笑いを堪えつつ、意識を手放すバルドだった。

「……………う？バ……………バル……………！バルド！」

気持ちよく眠る意識に、外部から聴きたくもない不快な響きが流れ、覚醒を促してくる。多分、声の質からしてソランのものだと判断する。半ば覚醒しかけた脳は、ソランの声だとわかった時点で、肉体への休息の命令を出す。しかし反応の薄い事に気付いたソランは、声だけではなく、身体的にも目覚めさせようと物理的な加速度を加えて来ていた。

新任の鉱山管理官によって意味の無い労働を強いられた精神と肉体は、心地よい眠りを手放す作業を放棄し、人の眠りを邪魔するブツタイに向けてある行動を命じるのであった。

「バルド…!!気付いた…って!?!痛ってえ!!?何すんだよ!!?」

筋肉によって、一定の加速度を与えられた右腕は。目覚めを促す存在の右頬に、正確に右拳を命中させていた。

「うるせえよ…がならなくても起きれる…今、良いところなんだ。飯の時間になったら起こしてくれ…」

「…って…何、アホな事ぬかしてやがる?まあ…そんな調子なら問題ねえな…」

「あ…?俺は何時も問題なんぞ起こしてねえよ。何があつた?」

「これだよ、これだよ……。覚えてないのかよ？アルヌスの丘を目指して進軍中に、お前さん、爆風になぎ倒されたんだよ？」

「……っ?!? ソラン!! 他の連中は無事なのか?! ライネルは?! ハンクはどうした? フェザーは?」

「やつと正気に戻ったか。安心しろ。皆、無事だ。お前さんがいつとう深手だったんだよ?」

奴隷小隊全員の生存を告げるソラン。ソランとの会話で、自分の状況を確認したバルド。傍に居るソランや、背中に感じるベッドの柔らかさ。身体に掛けられた、白く清潔なシート。室内なのに、昼間の外の様に明るい光をもたらす照明など…見た事も聞いた事もないモノで溢れていた。

「……………オイ……………ソラン…オレ達、上手い事捕虜になれたのか? どう考えても、待遇が良過ぎるぞ?」

「ああ…お前が気を喪つて倒れた所で、皆で肌着を脱いで必死に振つたのさ? 異世界の連中に、降伏の意思を示す遣り方なんぞ分からなかったから。裸になりや、闘う意思なんぞ無いだろうってライネルが言うもんだから、やつて見せたらさ。『火の矢』が後方の指揮官連中を叩き始めてよ。被害の大きさに連中は逃げて行き、オレ達は取り残され、メデタク緑のマダラ集団の捕虜になった訳さ?」

「言葉は通じないだろう? どうやったんだ?」

「門を潜って奴等の世界に渡った軍の連中が捕虜になっていてな? 其奴らが通訳で出て来たのさ。 奴等と同じような服装だったから、面食らったがな?」

「……そうか……上手くいったのか……」

「ああ! お前のおかげさ!! だが、今は休め。 何事も体力がなくちややつてられないからな。」

「……そうする事にするよ……ありがとな?」

「……そんじやな」

凄まじい状況を生き残って一皮剥けたのか。 摩訶不思議な状況にあっても、冷静に行動できているソラン。 自分自身も、この状況に慣れなければ。 そう思いながら。 今は、いつときの微睡みに意識を委ねるバルドだった。

## 雇用

『人生つてのは、平凡なようできて劇的な出会いなんてのもある。もつとも、本当に何も無い人生つてのものもあるがね。』

イタリカの酒場の壁に落書きされた文句

室内に居るにもかかわらず。陽の光と同じような証明の下で、何の材質で出来ているか分からないテーブルを挟んで、砂と土の色をした斑服を着た学者の様な雰囲気の人と相対するバルド。

「バルドさん……今回の聞き取り調査は、これで終了です。しかし、捕虜になつてから一か月程でコチラの言語を理解しはじめるとは……正直、驚きを禁じ得ませんな？」  
「俺だつて驚いているよ？ 帝国公用語と似ても似つかない言語なのに、何故か耳に残つていてな。気のせいか聞き覚えもある様な気がしているよ？ ゴトウダ少佐。」

「我々としては非常に助かりますね。コチラの世界に攻め込んで来られた方々は……何と言いますか……気位の高い方が多勢を占めておりまして。協力を拒む方が多いのです。」

「そうなのかい？いやはや・・・ジンドー的に扱うつてのはメンドイ事もあるんだねえ？俺達みたいに奴隷にして、拒否した瞬間に罰を与えて『協力的な態度』に変えちまえばいいじゃねえの？」

「とんでもない！確かに暴力で押さえつけるのは簡単ですが、我々が欲しいのは協力者であつて奴隷ではアリマセン。それに・・・失礼ですが、奴隷身分の時は相手に対して真剣に向き合つていましたか？暴力で得た利益など、相互の信用に基づいた取引に比べれば、得られるものなど微々たるものです」

バルドの真意を探る様な視線を投げかけて、同意を求める後藤田。

「確かにな・・・ゴトウダ少佐の言い分の方がシックリくるな。」

「そうでしょう？それでですね・・・提案があるのですが。」

「えらい改まつた口振りだねえ？コツチは捕虜の身分さ。何にでも話を聞かぜ？正直、待遇は最高なんだが。働かないで飯を食う立場つてのが・・・なあ？要するに『暇』なんだよ」

「それを聞いて安心しました。私が今から話す事は、お互いにとつても利益のあるモノだと確信していますよ。」

落ち着いた黒い瞳が、こちらの内情を見透かしたように光る。

「あんた等の言う所のギブあんどテイクつてやつかい？」



「ええ！その通りです！話が早くて助かります。」

「そうかい？で、どんな提案何だい？」

ひと通りの遣り取りを二週間も続けていれば、次に何を言い出すのか予測が出来る物だが。今回のゴトウダ少佐の提案は、バルドの想像を軽く超えていた。

「どうでしょう？アナタを含めた奴隷身分で捕虜になつた皆さん。ウチで働きませんか？」

まったく冗談の似合わない、生真面目な雰囲気の方から飛び出た内容は。バルドをして驚嘆に値するモノだった。

やれやれ・・・奴隷仲間に以前聞いた、安酒場に書かれた落書きの一節が頭に浮かぶぜ・・・どうやら、俺達の人生は『劇的な』方向に舵を切つたらしい・・・

ゴトウダの提案を頭の中でこねくり回しながら、優しい明るさの照明を見上げる。調子の変わらない照明と、劇的に変化するであろうこれからの『人生』設計を考えるバルドだった。

人工的な明かりの下。様々な種族が入り乱れて、教壇に立つ三十代前半に見えるヒト種の男に注目していた。

「・・・で、ゴトウダから受けた提案は説明した通りだ。全部に応えられる訳じゃ

ないが、横に居るサイトウが細かいところは話してくれそうだ。俺も、全ての会話の意味を理解している訳では無いから、通訳にグラハム殿を挟む。なんか質問あるか？」  
教壇に立つ男が、低音の良く響く声で皆に語りかけていた。

「ガイウス・・・？質問か？」

「いや・・・そんな上等なもんじゃねえよバルド。捕虜になったつてのに、あまりの待遇の良さに面喰つちまつてな・・・しかも、今度は敵側である俺達を雇うつていうんだろ？良い思いさせてもらっている所悪いんだが・・・その・・・なんか裏があるんじゃないか？」

先程の説明でも納得していないのか。六肢族のガイウスが、四本ある腕の右側上部腕を挙げて疑問を投げかける。

確かに、ガイウスが思う所には同意できる部分が多々ある。コノ世界での常識なら、捕虜や奴隷に賃金などは払わない。使い潰して仕舞か、見どころのある奴はそこそこの待遇で飼い殺しのどつちかしかない。疑問に思うのも当然だった。

「そちらの事でしたら、私が説明致します。バルドさんを経由してでは、真意が伝わらないでしょうから。いえ…決してバルドさんに落ち度がある訳では無いのです。私達自身が正直なところを伝えないと、勘繰られてもしようがないですからね。」

先程まで、通訳である帝国貴族のグラハムを介して意思を示さなかったサイトウが。

滑らかな帝国公用語で、ガイウスに答えていた。

「我々はコチラの世界に攻め込んで来た帝国に『借り』を返さなければなりません。帝国が、我々の領土に侵攻して作り出した損害。それらに対する補償を求めているのです。ガイウスさん、此処までは宜しいですね？」

サイトウの言い分に曖昧な首肯で応ずるガイウス。

「言い分は分かる。要するに損害に対する、それ相応の補償を帝国のアホ共に突き付けるんだろ？俺達に対する攻撃や、この駐屯地に存在する様々な兵器や武器。それらを操るあんた等が居れば、俺達は必要ないんじゃないかって事なんだよ？」

「ええ、謙遜するまでも無く簡単に帝国を壊滅させる事が出来るでしょう。しかし、その後はどうです？敵対組織を壊滅させた後、その組織が把握していた縄張りを廻って他の対立組織ともめ事が起こるのは必定でしょう。勿論、こちらの實力を見て表立ってチヨツカイを掛けてくることは無いでしょうが、新たな組織を創り出さなければなりません。そして、我々にはそのような事を試みる気はないのです。」

「何故だい？損失を補てんしなきゃ、被害を受けた連中に渡す金がねえじゃないか？」

「それはですね。我々は皆様方が考えるよりも遥かに豊かなんです。我々ですら解明できていないヘンテコな原理で、戦力差を考えもせず攻め込んで来る莫迦を相手に、真面目にヤル気が起きないからですね」

事実だった。二度に渡る世界的な大戦を乗り越え、度々起こる局地的な紛争を収め、世界政府の様なモノを、度重なる血みどろの内戦を起こしながら造り上げた地球世界。戦争によって加速された様々な研究成果や、湯水のごとく投資された莫大な金銭。其の行為の結果として開発された技術によって創られた軌道エレベーターが、人類を宇宙に押し上げる時代となっていたのだ。

正直、得体の知れない体系で造られた『異世界』に構っている余裕など無かった。たった15mしかない門を通じて侵攻し、疫病や害虫を気にしながら開発を進め、利益を上げようと名乗りを挙げる者が極少数しかいなかったのだ。(そんな事に投資するな、無限に広がるフロンティアである宇宙に乗り出した方が遥かにマシだからだ。勿論、『門』を構成する様々な事象は研究され『異界科学』として確立されつつあったが、他にも、怪異達の遺伝情報なども嚴重に管理された施設で研究されていた。)

「……まあ、あんたらの装備を見れば納得がいくが……」

「皆さんが見ている装備は一線級のモノもあれば、退役寸前の骨董品もあります。でも、それらを運用する人員は。私も含めて犯罪者や精神疾患者といった社会的不適合者の中から才能を持つものに訓練を施した者達です。皆さんと境遇は似てますよね。人員の有効利用といった所ですか？」

「でもよ・・豊かなんだったらこっちの事など無視すればいいんじゃないの？」

「ええ、そうする事で。またよからぬ事を企むアホが出てくることも考えられたので、根治治療を施さなければならぬのです。あとは、亡くなった者達の遺族の心の問題とかもあつて。それらを鎮めるためにも・・」

「お礼参りが必要つて訳かい？」

「否定はしません。現地事情に詳しく、帝国に何かしら『借り』のある方々に『お願い』している訳です」

サイトウ大尉の言葉には『裏』と言うものが無かつた。当たり前だつた。宇宙に進出し、アステロイドベルトに浮かぶ小惑星を開発する事によつて、空前の発達を見る現状に於いては。銀座に突如出現したテロ集団に対する本格的な戦闘・・しかも、いつ消滅するか分からない『門』を通じての侵攻など冗談に等しかつた。

だからこそ、サイトウやゴトウダを初めとする『異界事態対処集団』の構成人員は、『勿体なくない』人物や、『異世界』に対して熱烈な興味を抱いた志願者たちを選抜して訓練された者達だつた。

であるから、構成された人的資源を有効に活用するために、現地人を雇用・訓練して『数』を補わなければならなかつた。

お礼参りが必要になつた『銀座異界集団殺戮事件』。『門』の制限された幅によつて、武

装したテロ集団の展開には時間が掛かった。人々が持つ様々な情報機器と、街中の至る所に設置された管制通報システムによつて事態は即座に把握され、先頭集団が無差別な殺戮を行う頃には、重武装の治安部隊が展開を完了しており、被害を極僅かに抑えることが出来た。もつとも、当局の意見を意図的に無視してテロ集団に接触を試みた『報道員』26名と、物見気分で現地に留まった危機意識の低い23名が犠牲になつていたが。

まあ・・・いつの時代も他人の命なら失つても気にならない。鉄砲玉は数が多い方が良いし。躰が行き届いた『野犬』は使い勝手が良い。面倒事が増えそうなら反応兵器を放り込み『抹消』してしまえばいいことだった。

度重なる同族同士の大規模な殺戮戦争を行つてきた世界政府には簡単に感じられるモノだったし、その行為を躊躇う気などさらさらなかつたのである。

サイトウの説明に納得したのか肩を竦めるガイウス。

「納得したか？皆も、大体分かつてくれた様だな。其れでは具体的な『雇用』についての説明を、グラハム殿が行う。一応、帝国貴族の子爵だから言葉に気を付ける様に」

バルドの紹介で身分を明かされたグラハムが、苦笑交じりに教壇に立つ。

「ああ、そんなに殺気を膨らませないでくださいね？私は子爵と言つても商人上がりです。金で買った身分です。帝国の存続よりお金の方に興味がありまして・・・。それ

では、これからの皆さんの雇用についてお話します。雇用に興味の無い方は、旅用の装備と路銀を渡しますのでご自由になさってください。事実上『戦死』になっているから、帝国も追手を差し向けることは無いでしょう。ただ、アルヌスでの従軍経験を話して帝国に混乱を呼びかねない事をすれば・・・どうなるか想像できると思いますよ」

サイトウと同じ服を着た金髪碧眼の男が、商人らしい穏やかで人懐っこい笑みを見せながら。事実上に拒否のできない提案を、にこやかに告げるのだった・・・。

## 傭兵

帝国の聖地、アルヌスの丘。

神聖なる帝国の父祖達が、神に導かれて訪れた栄光の地。しかし、輝かしい歴史を刻み続けた時は過ぎ去り。今では異界の軍勢が占拠する敗北の地となっていた。

丘の周囲に張り巡らされた楔形の陣地には、周囲の風景に溶け込むような緑のマダラ服を着込んだ者達が配置に着き。帝国の攻撃を警戒していた。だが、あまり緊張感を感じられない。何故なら、遙かな高みから電子の目によって周囲を伺う存在がおり。侵入を試みる存在を監視していたからだ。

帝国が銀座に攻め込んでから二ヶ月。銀座に突如出現した古代ローマのような集団が、接触を試みた『民間人』を虐殺。待機していた重武装の治安部隊と、緊急出動した日本自衛軍によって殲滅された事件。『門』を通じて逆襲に転じた地球政府だったが、『異界』のファンタジー過ぎる状況に、頭を抱えなくなっていた。

『門』から出現した軍勢よりも、異世界から侵入してきた彼等の肉体の中に存在するであろう未知の病原体。それらを発見し、駆除または隔離を行わなければならない事の方が面倒な事だった。



世界防疫機関が安全宣言を発表するまで、銀座周辺は『門』を中心に半径10kmにわたって閉鎖・隔離され。多数が検挙されたテロ集団と、防衛にあたった全ての人員を研究・防疫・隔離しなければならなかった。この期間に、銀座に出店している商店や会社等は、保険適用外の事態について、政府に補償を求めて訴訟まで起こしていた。

史上空前の好景気に沸く地球政府にとっては、大した事が無い事案だったが。未知なるフロンティアに向けて、宇宙大航海時代に突入しようとしていた時期に、アナクロな思考をもったアホウ共を相手にするにも時間が惜しい。かといって、ほおっておけば何かしら同じことが起きるかもしれない。『門』自体の研究は急ピッチで進められていたが、恒久的に閉鎖する方法は発見されていなかった。

ではどうするか？大軍でもって攻め込み、帝国を消滅させるか？いや、帝国を屠った所で他の奴等が同じことを企まないとは限らない。では、ありつたけの反応弾を放り込み異界自体を不毛の地とするか？これまた、時空的に接触しているかもしれないコチラ側に、何かしらの影響が出るかもしれない。様々な案が出ては消え、議論は平行線を辿っていた。

面倒になった政府は、情報が圧倒的に足りない事が原因と断じて。異界調査の為に、新設の部門を設ける事に決定したのである。（本当の所は宇宙に掛かりきりで、大した利益も望めない事を新設の部門に放り投げただけだが）

かくして、『異界事態対処法案』が様々な思惑と打算、妥協の末に可決され『異界事態対処集団』が結成されるのであった。仰々しい名前とは裏腹に。構成される人員は、加盟各国から参加申し込みのあった志願者を中心に選別。紛争が終了した事によって、大幅に縮小された各国軍隊から指揮、統率、情報、兵站、搜索、戦闘など、各種技能を保持した軍人が派遣される事になったので在る。

要は、実質的なリストラで在る。生きていくには飯を食わなければならないから、仕事が必要になる。然れども、新しく建軍された宇宙軍には必要のない余分な人材。局地防衛などの任務には、新しい若い兵隊が就く。

それでは、『楽の出来そうな』部門に転属した方が良いに決まっていた。給料も悪くなく、対戦する相手は近代火器も実用化できていないアナクロナ連中。かてて加えて、『門』の防衛と現地反政府勢力の支援が主な任務。何より、『まだ必要としてくれる』事が大きな理由だった。

『そんな動きじゃ良いマトだ!!死にたいのかクズ共!!外壁ランニング、もう五周追加だ!!』

『なんだあ?その射撃の腕前は!!教本を読んでいないのか!?!それとも座学の時に眠っていたのか!!腕立て100追加だ!!』

『駄目だ！ダメだ!!もう一度だ!!たらたら動くんじゃない!!』

深夜に降った雨もやみ、涼しい風が吹いているアルヌスの丘。優しく吹き付ける風に乘つて、拡声器での指導の声が響き渡る。

軍隊に於いての屋台骨に当たる軍曹達が、新任の兵達を骨の髄からシゴキあげている光景が広がっていた。しかし、訓練風景は何処か違和感が存在していた。

練兵の為に叱咤激励を行う練兵軍曹達は普通の姿だったが。訓練を受けている者達は様々な人種で構成されていて、統一性が無かったのである。

人種では無い。様々なヒト種である。そう、体格はそれぞれ違うし、肌の色や髪の色、瞳の色など違っていても気にならないが。戦闘被服の隙間から見え隠れする体毛や、突き出た口に鼻。特異な形状をしたヘルメットに収納されたピコピコ動く耳など。

練兵軍曹にしても驚きを禁じ得ない者達で構成されていたのだった。(しかし、気にしていたのは最初の二日間だけで。それ以降は『鬼』となつて異形の集団を訓練していたが)

『ライネル?随分と勇ましい名前だな?エエ!!しかし、今の貴様はソンナ名前には値しない!クソにたかるウジ虫の様な動きじゃ、帝国の飛竜に食われて御仕舞いだ!!腕立て50追加だ!!』

『4本も腕もあるのに鈍い動きしか出来ないのか!?どうせ貴様の余分な腕は〇〇二一

する時しか役には立たん!!もう一度だ!!」

『そのバカみたいな図体に気合を入れろ!!機敏に動かなければ、帝国のオカマ共の振るう剣に当たつちまうぞ?まあ、オスでもないお前にはお似合いの最後だろうがな!?!だが、安心しろ。そうさせないために俺が居る。更に5周走つて来い!!』

地球政府に加盟する各国から派遣された軍人達が、鬼ですら逃げ出すのではないかと思われる程の声を張り上げ、様々な姿の現地人達を訓練とゆう地獄巡りに旅出させていた。

帝国の奴隷として死ぬしか許されなかつた彼等は、死ぬ事すら楽に思える状態に叩き落とされていた。

帝国公用語でさえ、理解し習得したとは言えない者達が。給料と待遇の良さに目が眩み、契約書にサインをした結果がコレだった。

毎日、毎日、言語の習得と。異界<sup>彼</sup>事態<sup>等</sup>対処集団が装備する兵器への習熟訓練。其れ等を運用出来るように一から行われる、肉體改造に近い体力錬成訓練。言語の習得に合わせる行われる基本的な算術から、高度に学問的な専門分野の座学。また、収めた学問を使つての兵器の運用や作戦行動訓練。その他にも衛生講習や調理実習、偽装、索敵、車両操作、整備など……

契約してから一ヶ月しか経っていないにも関わらず。訓練に投入される物資や人員

は、帝国最精鋭の第1軍ですらゴミにしかならない程のものであった。普通のヒト種ならアツサリ逃げ出すか、気が触れてしまいかするだろう。

しかし、帝国を遙かに上回る年月を『戦争』につき込んできた地球側にとつて、子供に近い人間を、効果的に戦闘兵器に作り変えることなど造作もない事だったのである。度重なる戦乱から得られた経験と知識が、遠慮会釈なく奴隷だった者達に放り込まれ、『使える』者に変化させられて行くのだった。

地球政府が異界事態対処法案に基づいて、特別地域異世界に逆侵攻してから半年。

投降してきた奴隷集団を取り込み、過酷な訓練を施して『アルヌス傭兵団』を結成。今日は、訓練終了に合わせて現地偵察に赴く記念すべき日となっていた。

銀座事件で得た様々な情報を元に、『門』を潜り抜けて侵攻した異世界の大地。

『門』周辺で迎撃に出た帝国軍を完膚なきまでに殲滅し。周辺30kmを掌握。これ以上の面倒が起きない様に、銀座事件で確保した高級将官達を和平交渉の使者として近傍に在るイタリカに派遣するも、返答期限である一か月を過ぎても明確な返答は無く。形だけの使者の派遣に終わっていた。(もつとも。貴族達の子弟である軍人達の身柄については、各貴族たちから水面下での接触があり。交換条件として、帝国内の情報提供

や交渉の受付役を約束させていたが)

銀座事件で捕虜になった者の身柄については、尋問が終了した者の中から高級軍人を選抜。順次交渉の窓口役を依頼していた。最初こそは難色を示していたが、様々なモノを使った説得により（宝石や貴金属。食物、衣服、酒、ゲームなど。・勿論、そのテの女性。果ては軌道エレベーターでの宇宙観賞など。・）捕虜の大多数が、進んで交渉役を引き受けてくれた。

当然と言えば当然で。意気揚々と異界に侵攻したものの、雨霰と放り込まれるガス弾や捕獲ネット、鎮圧用ゴム弾の物量の前に為すすべくなく敗退。

それでも、抵抗するモノには容赦ない『火の矢』が突き刺さり、無慈悲な『死』が訪れる。今まで経験した事も無い戦いでPTSDを発症する者も居て、戦いにすらならなかったのである。

初めは、言葉も通じない世界での捕虜生活が不安だらけだったが。一日三度は飯が出て運動も出来、仲間達とも時間制限があるが話も出来る。帝国でも重要な入浴も許される。（しかも、帝国ですら見たことも無いシャワーやシャンプーハット、垢すりタオル、電気風呂、きめ細やかな石鹸など…）

他の時間はお互いの言語を学び合うための聞き取りで。一ヶ月もすると、ソコソコに遣り取りができる様になっていた。人間、安全と安心。それと豊かな生活を送っている

と故郷が恋しくなるもので、特地に帰還する事を願う様になつていた。(余りの居心地の良さと、進み過ぎた魔法の様な世界に憧れ。亡命を希望する者も居たが：)

対して地球側と言へば、捕虜との意思疎通で帝国が攻めて来た理由がある程度把握できた。『門』と同じ原理で地球側に偵察に来た者達が、情報と共に幾人かの日本人を拉致。拉致した日本人の武力を調査し、開戦を決断したというものであつた。

なんともお粗末な開戦理由だつた。情報を聞き出した尋問官や、それらの尋問調査を統合して研究した調査官は、どう上に報告したか悩むほどだつた。

帝国を維持するために戦争が必要などは、何時の時代の話やら・・・しかし、拉致被害者がいるなら奪還しなければならず。その一点だけでも、逆侵攻は必要と判断された。

侵攻してきた帝国軍の装備と、捕虜への尋問調査によつて。帝国軍の規模と装備、戦術などが研究・調査され。充実した装備を準備していけば、戦いにすらならない事が判明したのも、逆侵攻への理由になつた。しかし、問題になつたのは『門』の大きさと、いつ相互の行き来が出来なくなるかもしれない事だつた。

逆侵攻してみても、『門』の大きさは限られていて。一日に通行できる交通量はたかが知れている。(銀座の中心地だつたが、治安と『門』の不安定さを理由に半径1kmは政府が買い上げて研究・防備施設に建て替えられていた。)補給の続かない軍隊など意味が

無いし、大兵力を展開した後に通行不可などになったら目も当てられない。

幸い、『門』自体の研究は急ピッチで進んでいて。何とか通行を維持する事は可能となった。『門』に入っている不可思議な文様が、ある種の回路であり。はめこまれた寶石や貴金属は起動するための装置だと判明。さらに、特殊な脳波に反応して起動する事も把握でき。その起動に必要な脳波の所持者も確保することが出来た)

条件は整ったが、進んでヤル気のある者が極少数だったため。妥協と打算、一部の熱意ある人々によって『異界事態対処法案』が可決・成立し。『異界事態対処集団』が結成され、<sup>特別地域</sup>異世界へと侵攻するのであった。

帝国の捕虜達への尋問と調査によって、<sup>特別地域</sup>異世界の風土や慣習、人種などが判明。それらを発表するに至り、一部の人々に熱狂的に受け入れられ。政府が考える想定人員よりも遙かに多くの人々が『異界事態対処集団』に志願してきたのは驚きだったが・・・。(何せ、最初に侵攻してきたときに顛われた怪異達ゴブリンやコボルト・オーガー・トルルなどが居るのは判明していたから。エルフや獣娘、翼人、ドラ娘、人魚などなどファンタジー要素テンコ盛り!!応募してきた歴戦の軍人ですら『ケモツコハーレム王に、俺はなる!!』なんて真剣に語る者も出る始末・・・宇宙開発に忙しい人々にとっては、丁度良い事案になったのかもしれない・・・)

かくして、派遣される兵力は一個旅団編成。それに、近接支援の航空隊と現地人を雇



用して訓練する部隊。50名ほどの研究・調査・疫学調査の為の医者、学者陣。帝国と交渉するための政府外交団の派遣が決定されたのであった。

『諸君らが過酷な訓練を耐え抜き、この場に立つ事は。訓練を指導してきた我々にとつても、喜ばしいことである!!異世界の装備、言語、学問、慣習、医療などなど：専門分野をも収め、初めて『アルヌス傭兵団』として周辺地域に派遣されることは輝かしい一ページとなるであろう!!終わり!!』

『敬礼!!』

『アルヌス傭兵団！偵察部隊！出動!!』

特地派遣部隊司令ブライアン・シエリダン少将の訓示が終了。訓練を終了した者達が、誇らしげな顔と緊張した雰囲気を纏いながら。各分隊毎に割り当てられた車両に搭乗し、それぞれの偵察地域に向けて出発してゆく。

元は鉱山奴隷だったとは思えない精悍な顔つきと、鍛え上げられた肉体を戦闘服に包み。忠誠を誓った『アルヌス傭兵団』の隊旗をあしらったワッペンに手を当てながら、それぞれ覚悟を持って任地に赴く者達。

「ようーバルドー！なんだか凄い事になっちまったなあ？まさか、異世界の軍隊に入っちゃまうとはな？」

M2A3ブラッドレー歩兵戦闘車の操縦席から、マイクを通してソランのお気楽な声が流れてくる。

「鉱山奴隷としてクソみたいな扱いで一生を終えるよりはマシだろ？だが、こんな事になるとは思わなかったがな。」

車長席から前方を進む特地派遣隊・日本自衛軍のハンヴィーを見ながら返すバルド。

「でも、待遇は最高だし、飯も旨いし、給料まで出るんだから。俺は帰る所も無いから、ありがたいよ。」

砲手席で羽根を折りたたんだフェザーが、鳥人種ならではの長距離視界で周辺警戒を行いながら笑顔を作る。

「確かに。俺も記憶が無いし、帰る所も無い。そういう意味では『アルヌス傭兵団』が故郷とも云えるかもな？」

「バルドの言葉が正しいな。俺も故郷に帰る気も無い。皆が居る傭兵団が忠誠の対象だ」

兵員室でM240HACOG装備機関銃を点検していたライネルが、走行中の車両音に負けない声で吠えていた。

「おっ!?ライネルの滑舌が良くなったなあ！英語の習得が原因なのかもな？」

同じく十分な体格を持ち、且つ四本の腕を備えた六肢族のガイウスが。M240HA

COG 装備の給弾ボックスを確認しながら茶化していた。

「ら・ライネルと違って・・まだ、上手くしゃべれない・・でも、訓練のお蔭で自分に自信が持てたよ」

狼系ヒト種のハンクが、マクミランTAC50の運搬ケースを大事そうに撫でながらガイウスに微笑んでいた。

「皆、それぞれに此処に忠誠を誓う事柄が在るのか・・」

肩に付けられた『アルヌス傭兵団』のワツペンを撫でながら独り言ちるバルド。

「独り言は、もっと小さい声で言ってくれ？皆、仲間だし。家族のようなもんさ？」  
バルドの声を聞きつけたソランが、気恥ずかしそうに気持ちをだす。

「そうだな・・さあ!!そろそろコダ村が見えてくるぞ!既にジエイグンの連中が接触をしているが、今回の主役は俺達だ!気を抜くなよ!!」

アルヌスから続く草原の中の街道。車長席からコダ村の炊事の煙が見える。その先に広がる青空を見ながら、仲間達を頼もしく感じるバルドだった。

## 中尉

春の麗らかな風が、アルヌスから広がる草原地帯を渡って行く。美しく波打つ草原から上に目を移せば。地平線まで続く青い空が、緑の草原と境界線を合わせる様に広がっていた。

そんな春の一時の優しさを邪魔する様に、風の音を遮る地響きと金属音が街道上から響いてきていた。

「そくらが蒼いねえくさっすが異世界！」

アルヌスの丘からコダ村に続く巡礼街道上。特遣部隊の汎用輸送車両であるハンヴィーの、M134ミニガンを装着したOGPK表甲銃塔キットから空を見上げながら感心したように

に呟く男。

「こんなの北海道にだってあるつすよ？あゝあゝせつかく自衛軍の選考に受かって、特遣部隊に入れたのに……もつと……こうつケモツコみたいな感じは無いんですかねえ？」

ハンヴィーの運転席でため息を吐きながら上の男に言葉を投げる。

「しようがないだろ倉田？異世界ってだけでファンタジーだろうよ？銀座事件のモン

スター見たでしょ？あんな連中が居るんだからエルフだって、妖艶な魔女だって、半裸のラミアちゃんとか居るかもよ？」

「伊丹中尉はエルフ萌えですかあ？俺は断然獣っ娘ですよ!!チヨイと体毛が在って・・イイ感じですよ!!」

「いるじゃんウチの最後尾に。オスだけど・・。」

「まあ・・ライネルやハンクを見れば想像は出来るんですけど・・あそこまで獣要素が濃くない方がいいっす!!おっと・・。」

クダラナイ会話で集中が切れたのか、街道上に出来た小さな窪みでバウンドするハンヴィー。思ったより大きな揺れに車内での会話が途切れる。

「おい倉田!ちゃんとしろ!!伊丹中尉もお願ひしますよ?それに『アルヌス傭兵団』の連中、けっこう気合が入っています。今回はコダ村での慰問活動と情報収集に、彼等の慣熟訓練を兼ねていますから気を張って下さい。特地派遣隊に地元枠として、優先的に一個大隊の人員を送り込める日本自衛軍なんですから。恥ずかしくない行動を見せなければ」

ハンヴィーの後部座席から年配の男性が、若干厳めしい言葉遣いで二人の遣り取りを嗜めていた。

「了解です。桑原曹長。倉田!チャンと聞いたか?」

「ひでえ!?俺のせいっすか?!これだよ……」

装甲統塔キット

OGPKに居る伊丹に運転席にかかるくケリを入れられ、迷彩服Ⅲ型と同じ迷彩柄のブッシュハットを揺らしながら文句言う倉田だった。

「確かに異世界だ……常識が通じないから、気をつけて行くか……今度のコミケにいけなくなったら閣下にも申し訳ないしね……」

「なんか言いましたか隊長?」

「何でもない!もうすぐコダ村だ。安全運転で頼むぞく倉田!」

「任しといて下さい!ケモっ娘に逢うまでは死にませんよ!」

「……フラグだぞく倉田……」

異世界で偵察行動している軍人とは思えない遣り取りをしながら、コダ村に向けて進む伊丹達だった。

銀座事件を受けて、急遽成立した『異界事態対処法案』。それにより設立された『異界事態対処集団』

宇宙開拓大航海に熱中している人類にとっては、辺境で起きた小ちやなテロ事件とゆう認識でしかなかった。当たり前といえればそれまで。軌道エレベーターによって簡単に宇宙に揚がれる者達に、そんな事に構っている暇は無かった。

新しい事柄が次々と発見され、それによって革新される知識や技術。其れ等を用いて太陽系内を自由に飛び回る物資や資源が、さらに人類を高みに飛び立たせていたからだった。

自分の仕事をやればよかっただけ、それ以上の繁栄をもたらしてくれる宇宙<sup>ソラ</sup>は。まさに現代の黄金郷<sup>エルドランド</sup>に他ならなかったのである。

最初の頃こそ騒がれもしたが。繁栄を謳歌する人類にはスグに忘れられ。今ではマスコミのニュースは、深宇宙探査の進み具合だの、新規技術の向上だの、『門』の研究によつてもたらされそうな『高次元跳躍航法』の研究などが溢れていた。

要するに、ヤル気さえあれば。誰でも繁栄を掴むことはできる時代になっていたのだった。(勿論。繁栄の度合いに大小はあったけれども)

騒がれた頃には『異界事態対処集団！勇ましく設立!!』なんて言葉が溢れていたが。今では仕事の無くなった退役寸前の軍人や、社会不適合者。ファンタジーに熱烈な興味を抱く者達の寄り合い所帯になっていて。呼びにくい『異界事態対処集団』は『特別地域派遣隊』を略した『特隊』としか呼ばれなくなり。当の『異界事態対処集団』ですら、長つたらしい名前をやめて、『特隊』で統一していたのである。

ヤル気のない事この上ないが、『特地』の状況が掴めてきた最近では、仕方のない事ではあった。予算が有り余った政府での余剰人員の掃き溜め。左遷ポスト。人外大好き

！古代ローマでヒヤツハ〜！などなど：散々な言われ様であった：

しかし、その内情は全く違っていて。内戦で何度も死線を潜った者達で構成された上層部。様々な紛争を生き抜いた兵達。潤沢な物資に予算。優秀な科学者や研究員。国際関係が緊張することも無くなった外交に嫌気がさした外交団。などなど：自らの生存の場を無くした者達の集まりであった。

政府の方でも、いい加減な対応を表面上は見せていたが。内実は全くの逆。生物・遺伝情報の宝庫であり、未だ出会った事すら無い『魔法』などの『異界科学』など、未知の分野のオンパレードだった。

もし、それらの情報や技術。疫学的に未知なウイルスや細菌によるバイオハザードが起きれば。経済的な繁栄など、あつとゆう間に吹っ飛んでしまう。誰でも『○○ドア』の様に好きな場所に現れる事が出来たならば：恐ろしい事態になることは明白だった。

だからこそ、表面的には人外つ娘やエルフ。妖艶なドラ娘。ロリババアなどのファンタジー要素を前面に出して、肝心な部分では鬼の様な情報統制を行っていたのだった。

最悪の事態になる様であるならば。派遣した人員共々、有り余る反応弾で吹き飛ばす事になっていた。（その事を秘匿する為に、銀座周辺は政府管理下に置かれ。銀座中心地下100mには多数の反応弾が備蓄されていたのである）

勿論。派遣された隊員達には、選考の段階である程度の覚悟が求められていた。それ



でも伊丹や倉田の様に、熱烈に参加を希望する者は後を絶たなかったのである。オタクの一念……恐るべし……（桑原曹長は、経済的に潤沢な給与の支払いが理由だったが……）

コダ村に向かう街道上。前に行く二台のハンヴィーの第三偵察隊の隊長が乗る方が、小さな窪みでバウンドした後、数旬の間を於いてフラついていた。

「おいおい……伊丹中尉の指揮車、大丈夫なのか？」

全周警戒をしながら前に行くハンヴィーを見ながら、独り言のように呟くフェザー。

「何度も行っているコダ村への道だ。少し気が緩んだんじゃないのか？」

M2A3ブラッドレー歩兵戦闘車のハッチの開いた運転席から、頭だけを出してフェザーに応えるソラン。

「向こうは俺達の面倒も見なきやいけないんだ。イロイロ相談事でもあるんじゃないのか。其れより、今夜は俺達だけで夜間哨戒訓練だ。本来なら小隊で行動しながら行っただが、コイツの数が揃ってないからな。」

車長席からブラッドレーの装甲版を叩きながら、二人の会話に飛び込むバルド。

「伊丹中尉の所属する日本国自衛軍が運用する89式改つてやつは、なかなかいいらしいぜ？砲は35mm、ミサイルは撃ちっ放しの……確か中多とか言ってたなあ。コイ

ツよりチョイとデカくて。兵員室も高さがあって、乗り心地も悪くないそうだけ？ウチはデカいのが多いから、交換してくんないかなあ？」

「でもよおバルド。コイツを乗りこなせたと云えない俺達には、出来過ぎた乗り物だろ？俺達の持つ武器なら、コッチの連中相手では十分すぎるぜ。」

「俺もそう思うけどさ……話しに聞く『炎竜』なんて奴が……」

「おい!!止めるよバルド!!ソランも話し合わせんな!!よりにもよって『炎竜』なんて……冗談にもほどがある!!」

砲手席のフェザーが、警告する様に大きな声を挙げていた。

「……悪かったよフェザー……悪気は無いんだ。俺、鉦山奴隷の時の記憶しかないから。『炎竜』がどれだけ凄いモノか知らないんだ。それに、コイツがあるから気が大きくなっていたのかもしれない」

「……いいんだよ……アソコにずっといたのなら知らなくても当然だよな……俺の故郷の村はアイツに滅ぼされたのさ……俺は村の最後の生き残り……でも、この装備ならば……仇が討てるかも知れない……」

右腕に付いた火傷の跡を見ながら、過去を思い出す様に。自分の言葉を噛みしめる。

「お三方……話に熱を挙げるのは良いが、もうすぐコダ村だけ？それに、『炎竜』なんて奴とは出会わない方が良いに決まっている。ヤッコさん休眠期だから、あと五十

年程は眠ったままだろうよ？」

兵員室で待機していたガイウスが。気合を入れるとばかり、にエンジン音に負けない音量で三人に告げていた。

『バルド二等兵！もうすぐコダ村だ。情報交換顔見せの準備を頼む。それと夜間哨戒訓練には、俺と富田が随行する。訓練を監督する者が居ないと、マズいでしょ？』

コチラの弛んだ雰囲気を読んだのか。伊丹中尉から無線が入る。

『了解です。伊丹中尉。僭越ですが、隊内符丁忘れてませんか？』

『あはははは．．．結構、顔に似合わず律儀だねバルドちゃん？大目に見てよお？』

『．．．仕方がないですね．．．了解です。アルファ3、アウト』

軍事行動中の指揮官とは思えない伊丹中尉の言動。過酷な訓練を施してくれた練兵軍曹とは違った人柄に、可笑しさを覚えるバルド。

ライネルが言っていた様に、少し変わったヒトなのかもしれない。そう言えば、ライネルと話が合うようで。様々な薄っぺらな絵草紙を（伊丹中尉は『同人誌』と呼んでいたが）内容を見ながら、ライネルと激論を交わしていたんだっけ．．．確か．．．メイコンとか、何とか．．．？

ライネルの奴も、絵草紙を読む様になってから『ニホンゴ』の習得が早くなったし。あ

れだけ中尉と『ニホンゴ』で遣り取りできるんだ。俺も読んで見るかな・・・。

そんな事を考えながら、夜間訓練を行うコダ村周辺の地図を。もう一度確認しながら、頭に叩き込むバルドだった。

その後、絵草紙を読んだバルドがどうなったか・・・伊丹を見る目が少し変わったようだった・・・。